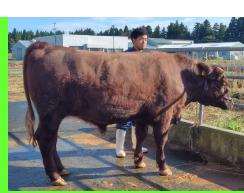




# 地域資源「酒粕」が肥育牛に与える影響

岩手県立農業大学校 及川 侑大



## 1 みどり戦略との関連性

資材・エネルギー調達における脱輸入・脱炭素化・環境負荷軽減の推進

地域・未利用資源の一層活用に向けた取り組み

## 2 目的・背景

- ・ 飼料価格の高騰に伴い経営困難に陥る畜産農家が増加
- ・ 自給飼料や低コスト飼料(エコフィード等)等の利用による飼料価格高騰への対策が現在の畜産の課題
- ・ 昨年の卒業生の研究で、酒粕の需要低下によって廃棄量が多いことを確認、同時に酒粕を乳牛に与える研究を行った結果、飼料としての利用価値を確認
- ・ 牛に酒粕を与え、その牛の糞尿を、酒米の水田に利用して、その酒米で酒粕を作ること循環型の農業が可能(図1)。酒粕を肉牛に利用して平均以上の結果を得ることができれば、低コスト飼料としての価値の証明が可能。そして、低コスト飼料としての価値が証明されることで、酒粕の需要回復に繋がるきっかけとなると考え、肥育牛に与える影響を調査

## 3 取組内容

- (1) 供試牛 肥育牛2頭  
日本短角種(黄短14)1頭及び黒毛和種(黄518)1頭
- (2) 酒粕給与期間  
ア 令和7年1月～10月(黄短14)  
イ 令和7年5月～10月(黄518)
- (3) 酒粕給与量  
給与濃厚飼料全体の7%
- (4) 調査内容  
ア 牛の枝肉調査(対象牛:黄短14、出荷時に実施)  
(ア) BMS  
(イ) 枝肉重量  
(ウ) 出荷時の体重  
イ 酒粕の嗜好性調査(対象牛:黄短14及び黄518)  
(写真1)  
(ア) 調査飼料:用いる酒粕は固形のもの(写真2)。  
(イ) 調査回数:5月から毎週1回実施  
(ウ) 方法:酒粕を与え、残飼があるか目視で確認  
ウ 牛の増体調査(対象牛:黄14及び黄518)  
(ア) 期間DG(2週間に1回)  
(イ) ビタミンA濃度測定(月に1回)  
エ 過去と今回の短角牛との成績比較  
(対象牛:黄短14)  
枝肉及び増体成績を、過去に農大で肥育されていた短角牛と比較  
オ 酒粕給餌コスト計算

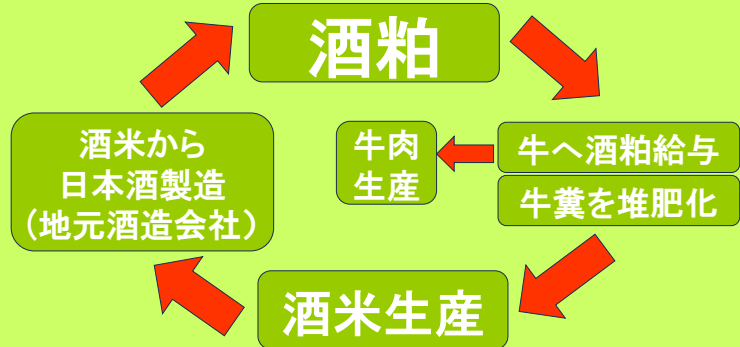


図1 岩手農大循環型農業の取り組み

## 4 結果

- (1) 牛の枝肉調査  
ア BMS  
BMSナンバーは2という評価だった。  
肉質で最も評価されたのは、脂肪の光沢であった。  
イ 枝肉重量  
枝肉の重量は418kgだった。  
ウ 出荷時の体重  
黄短14の出荷時体重は706kgだった。
- (2) 酒粕の嗜好性調査  
酒粕を固形のまま給与しても、黄短14及び黄518は興味を示さなかったが、濃厚飼料に混合して給与すると興味を示し、採食した。
- (3) 牛の増体調査(対象牛:黄短14及び黄518)  
平均期間DGは0.8kg/日、最大1.8kg/日、最小で0.0kg/日だった。
- (4) 過去と今回の短角牛との成績比較  
(本校で肥育を行っていた黄短11を対照区として、黄短14の出荷時期の体重を比較)  
ア 体重  
黄短14は706kg、黄短11は、835kgだった。
- (5) 酒粕給餌コスト計算  
(本校の常法の肥育飼育管理で用いる飼料コストを対照区として比較)  
ア コスト試算(図2)  
酒粕を用いたコストは合計139,288円で、1日あたり507円だった。  
対照区と比較すると合計で69,712円、1日あたり253円差のコスト低減となった。

表1 酒粕飼料コストの計算(1頭あたりのコストとして計算)

円	新名人	酒粕	宝	合計	日
黄短14	132,000	7,288	—	139,288	507
対照区	132,000	—	77,000	209,000	760

## 5 まとめとこれからについて

〈まとめ〉今回は、酒粕を肥育牛へ給与することで、飼料コストの低減につながる可能性があることが判明した。酒粕給与により、脂肪の光沢の評価につながった可能性もあると考えた。

〈今後の予定〉今後も岩手農大循環型農業の取組の一つとして、肥育牛への酒粕飼料利用の取組を継続予定であり、肉質や増体性について引き続き検証を行っていく。



写真1 酒粕嗜好性調査の様子



写真2 今回用いた酒粕